

うらしまたろう

にほん ばなし
●日本むかし話



ぶん・まつたに みよこ

え・いわさき ちひろ

To my dear friend, George H. Balazs,
With best regards and many thanks
I A ⊕ $\frac{1}{2}$ $\frac{1}{2}$
Stan Uchida
June 8th 1976

うらしまたろう

● にほん日本むかし話 ばなし

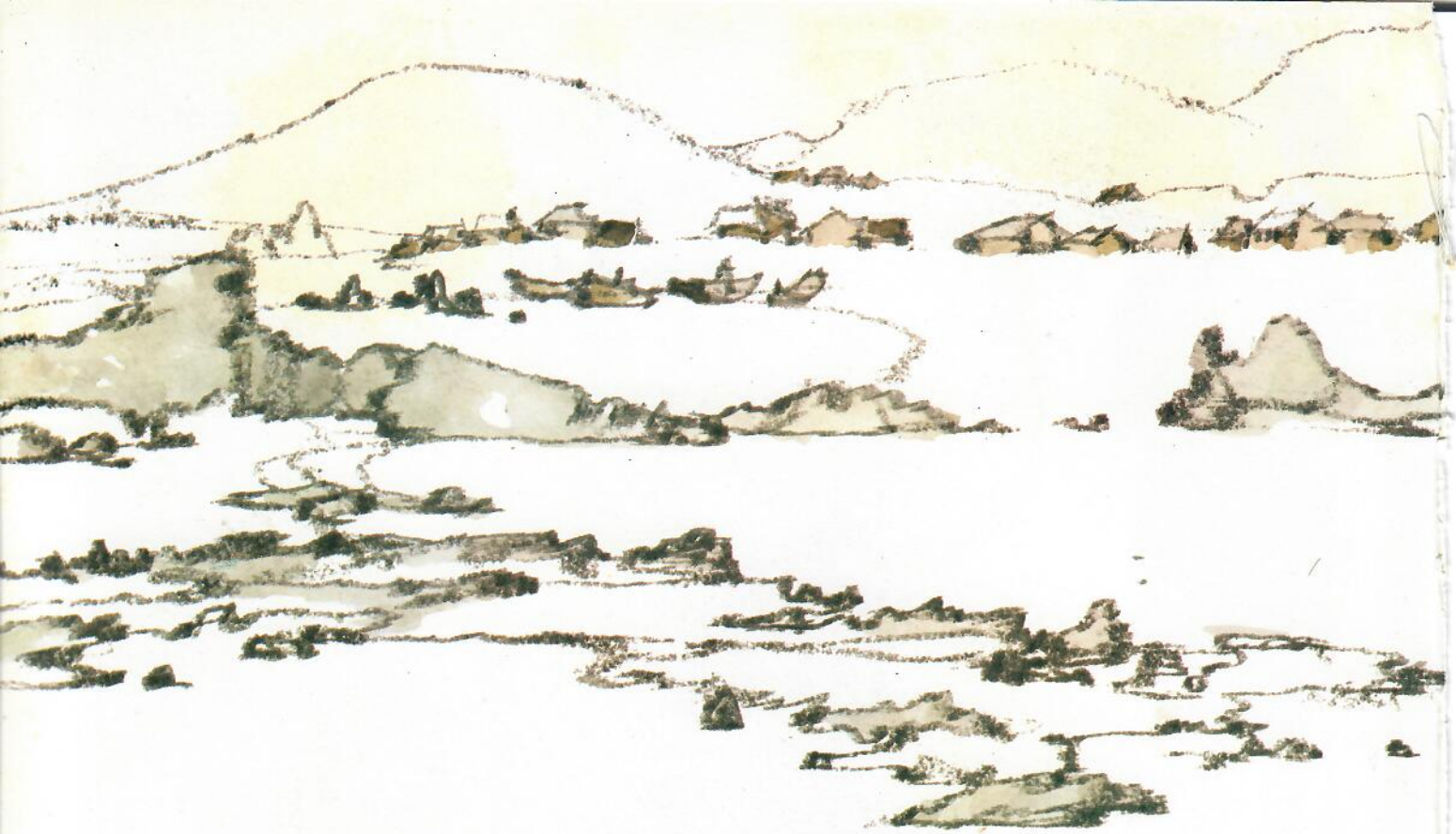


ふん・まつたに みよこ え・いわさき ちひろ

むかしむかし、うみべの むらに
うらしまたろうという わかものがいた。

たろうは、まいにち うみへ ふねを
こぎだしては、さかなを とって、
くらしをたてて おったと。





たろうは、

「かわいそうに。かめを はなしておやり。」

とって、ありったけの かねを

こどもたちに やった。

たすけた かめを てのひらに のせ、

つくづくみると、なんともうつくしい、

ごしきに かがやく かめであった。

たろうは、みとれていたが、

やがて、かめを うみの なかへ

そっと はなしてやった。かめは よろこんで

もぐったが、また おくりと ういて、ちいさな あたまを さげた。



あるひのこと、いつものように おきに だが、
どうしたことが、さかないっぴき つれない。がっかり
して かえってくると、はまで わいわいと さわぐ
こえがする。みると、こどもたちが ちいさな かめを
たたいたり、つりさげたりして いじめて いるのだった。





「ありがとう っているのか。わかったよ。はやく おかえり。」



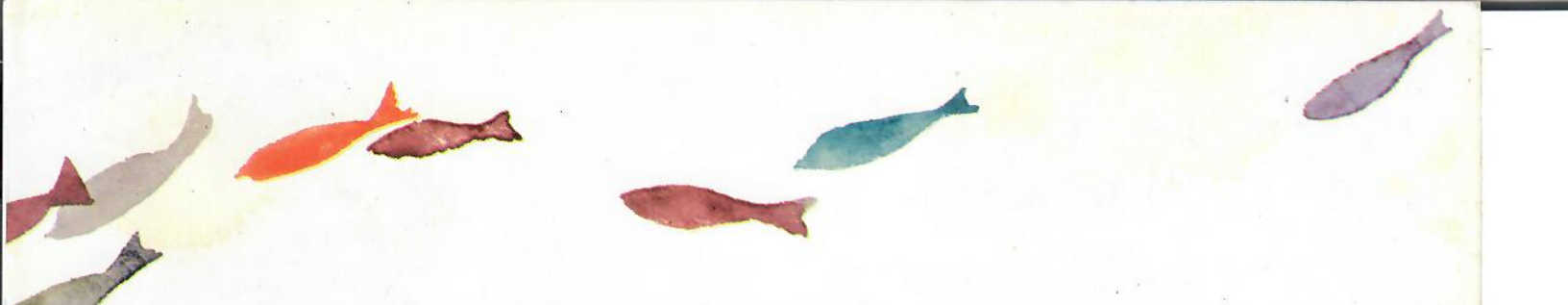
つぎのひ、たろうが つりを していると、おおきな かめが
ぷくりと かおを だした。かめは、あたまを さげて、こういった。
「たろうさま、きのうは、ごしきの かめを たすけていただいて
ありがとうございます。おれいに、りゅうぐうへ おつれするようと、
りゅうおうさまの おおせです。どうぞ、わたしの せなかに
おのりください。」

たろうは たまげたが、いわれるままに、かめの せなかに
のった。かめは ゆらりと およぎだした。

ひろい うみを、しらしらと、なみを わけて およいでいく。







いつのまにか、たろうを のせた かめは、うみの なかを
およいでいた。

うみの そこには、やまも あれば、たにも あって、
かめは、そのあいだを、どこまでも およいでいく。

すると、あおい みずの むこうに、ぼうっと かがやく
ごてんが みえてきた。


りゅうぐうじょうだった。



あか、しろ、ももいろさんごの
はやしを とおりぬけていくと、
すきとおるような かいがらを
やねに ふき、さんごを はしらに
した りゅうぐうの まえに であ。

ごてんは、なみが ゆらめく
たびに、きらきると かがやいた。
そのまわりを さまざまな
さかなが ことりのように
とおりすぎっていく。





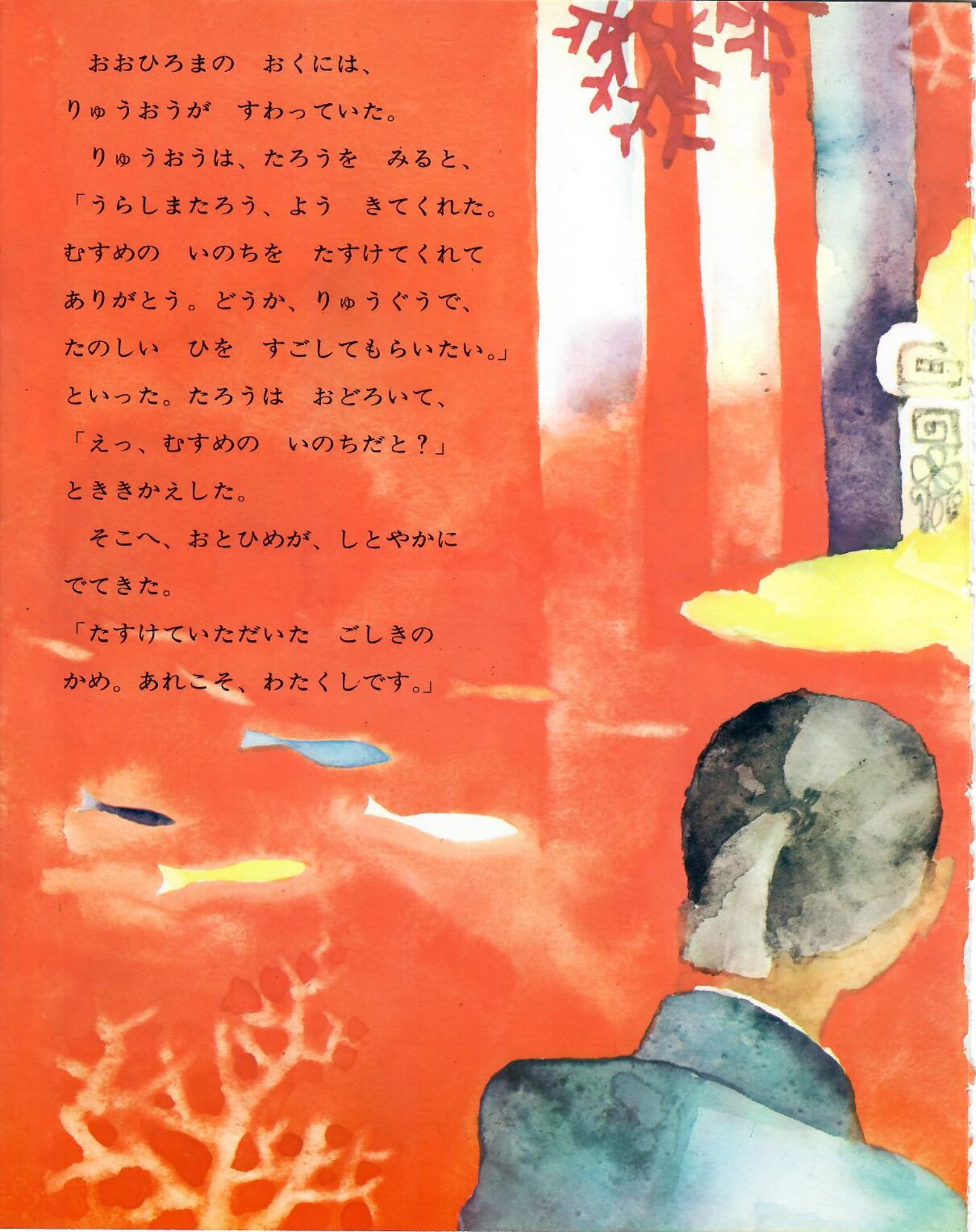
うらしまたろうは、ゆめを みているよう。ほんやりと かめの
せなかから おりると、でむかえた うつくしい めしつかいたちが
てをとって、ごてんのおくへ あんないした。

おおひろまの おくには、
りゅうおうが すわっていた。

りゅうおうは、たろうをみると、
「うらしまたろう、よう きてくれた。
むすめの いのちを たすけてくれて
ありがとう。どうか、りゅうぐうで、
たのしい ひを すごしてもらいたい。」
といった。たろうは おどろいて、
「えっ、むすめの いのちだと？」
とききかえした。

そこへ、おとひめが、しとやかに
でてきた。

「たすけていただいた ごしきの
かめ。あれこそ、わたくしです。」





たろうは たまげた。あの ごしきの かめが、この
ひめぎみかと、まじまじと みつめていると、おとひめは
ほほえんで、いった。

「うみの うへの ようすが みたく、かめに すがたを
かえて まいました。ふとしたことから、こどもたち
につかまって、どうなることかと おもいました。いのちを
たすけていただいて、ありがとうございます。さあ、
ごちそうを めしあがってくださいませ。」

おとひめは たちあがって、ひれを ひとふり、
さっと ふった。

と、みごとな ごちそうが、たちまち あらわれた。

*ひ れ……むかしの おんなの ひとが からだにつけた かざりの
ぬの。くびに かけて、りょうほうへ ながく たらした。







さけは、こはくいろの さけ。すきとおるような おさしみが
はなのように ならび、きんの うつわ、ぎんの うつわに
もられた ごちそうの おいしさは、ほほが おちるほどだった。

おとひめは、たろうに さけを すすめ、ごちそうを
すすめていたが、やがて、また ひれを ふった。みるまに、
たくさんの おどりこたちが あらわれて、しなやかに
てを さしのべ、かるがると おどった。

*こはくいろ……すきとおるような きれいな きいろ。



ごちそうが すむと、うらしまたろうは おとひめに つれられて、
ごてんの なかを あるいた。みごとな ふすまを ひきあけると、
そこには ひろびろとした たはたが ひろがっていた。





ちょうど、たうえの まっさかりであった。たろうが じっと みて
いると、なんと ふしぎなことに、うえたばかりの いねは、みるまに
ずんずんと のびていく。まわりの けしきも、それにつれて、いちめん
あおあおと しげった なつに なった。

とおもうまに、いねは、おもたく、ほをたれて、かぜの おとも
すずしく、あたりは あきに なっていた。

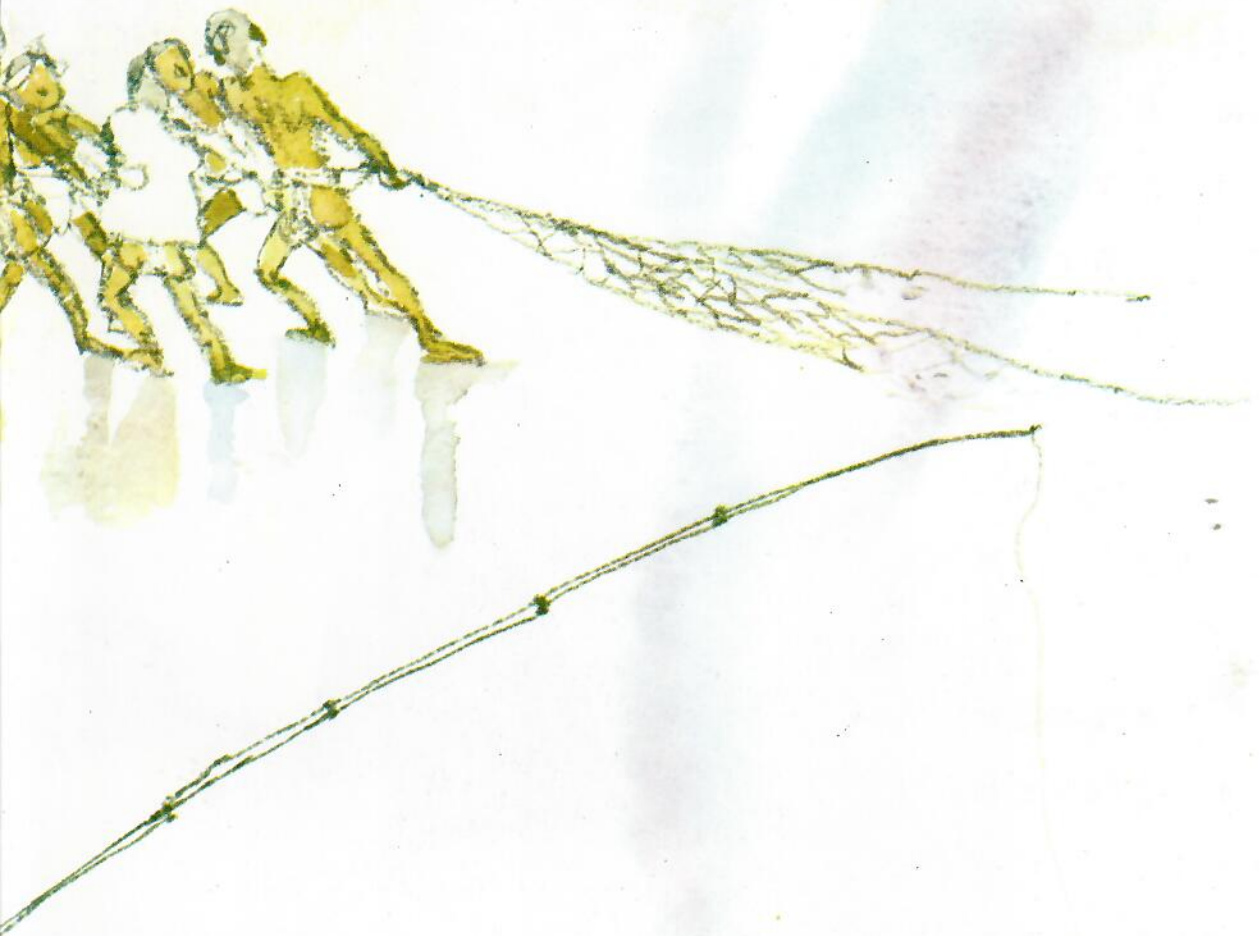


やがて、ゆきが ふりだした。たも、はたけも、とおい やまも、ゆきに

うもれた。うらしまたろうは おどろいて、ほんやりと たっていた。



turn



うらしまたろうは、まいにちが ゆめの なかに いるようで、
どれほど ひが たったのか、かぞえても みなかった。

あるひ、ふと たろうは、ふるさとの むらで つりを している
じぶんの すがたを おもいだした。ととった ははおやの
すがたが うかんだ。むらの ひとたちが あみを ひいている
すがたも うかんできた。

たろうは、きゅうに むらへ かえりたくなかった。

そうおもうと、どうにも がまんが できない。

たろうは、りゅうおうと
おとひめに わかれを つげた。

ふたりは かなしんで、
いつまでも いるようにと
すすめたが、たろうの
きもちが かわらなかった。

すると、おとひめは、
ひとつの みごとな はこを
くれた。

「これは、たまたまのこと
もうします。これさえあれば、
また りゅうおうへ かえる
ことが できる たからものです。
けれど、けっして なかを
あけては いけません。」





たろうは、たいせつに たまてばこを
かかえ、また かめの せなかに のった。

みるみる おとひめの すがたも、
りゅうおうの すがたも、とおく
なっていく。

かめは、うみの なかの やまを
こえ、たにを こえ、どこまでも
およいで、とうとう たろうの むらの
うみべへ ついた。

twm.





「おらの むらだ。ついたぞ、
かえったぞ。」

たろうは、かめから とびおりた。

なつかしい やまが みえた。しかし、
むらの ようすが、どこか ちがっている。

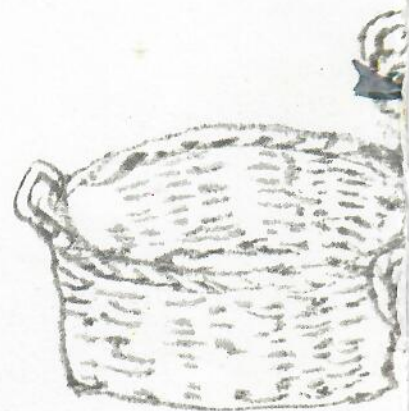
たろうは、わがやに はしってかえった。

いえは、かげも かたちも なかった。

あたりを みまわせば、みたことも
ない ひとたちが はたらいている。

「うらしまたろうの いえは、ここでは
ないのか。」

「うらしまたろうだと？ ああ、^{きん}三びやくねん
まえに りょうへ いったまま いなくなった
という たろうの いえか。とっくに くさって
たおれたよ。」







turn



(おわり) すわりつけいた。
 いっさいはまに
 おとひめがなつかしく、
 りゅうごうがこいしく、
 たろろはないた。

すると、とおいりあのはてから、なみが
 おとひめのうたをほんできた。
 あけては、いけないと、いったのに。
 あけては、いけないと、いったのに。
 あなたのわかいいのちを
 そのはこにしまっておいたのに。

「三びやくねんも せかしの になくなった
だと……。それでは、おらが りゅうぐうへ
いつているまに 三びやくねんも たったのか。」
たろうは、ゆめでも びているように、
ふらふらと あるきました。
いきあう ひとは、そのおとも せいらぬ
ひとばかり。もちろん ははおやも いるはずがない。
たろうは、たまたまなく せびしくなった。
わかれてきた りゅうぐうが ただ こいしく、
あけては いけないという やくそくも わすれ、
たまたまこそ せいらいた。
と、ひとすじの けむりが たちのぼって……
たろうは、みるみる あしは よろめき、
かみは ゆきのように しろい おじいさんの
すかたに かわった。



*この絵本について

松谷みよ子

浦島太郎という「ムカシムカシ、ウラシマハ……」という小学生唱歌を思いうかべられる方も多いと思います。

浦島の話がいちばん古く文献に残っているのは「万葉集」といわれていますが、ほかにも「日本書紀」「風土記」「御伽草子」、そして近くは幸田露伴、森鷗外、太宰治などが、さまざまの浦島を書き残しました。また昔話や伝説として、いろいろなかたちの浦島が日本の各地で語りつたえられ、日本人の浦島にたいする共感の深さをしめしています。

浦島説話の生まれた古代は奴隷制の社会でした。人びとはその苦しき、悩みのなかから、しあわせな、年をとることのない安楽国を夢みました。それが天上の世界であり、龍宮である、といわれています。

しかし、ただ安楽国に遊んだだけなら、浦島はこのように愛されなかったでしょう。安楽国に安住できぬ人間の心、求めて苦しき多い現世へ帰ってくる太郎の人間性、そこにもう一つ、人びとの共感があつたのではないかと思います。

この太郎の願いは、龍宮と現世とのずれのために打ちくだかれます。わかい太郎が玉手箱から立ちのぼる一すじの煙りとともに老人となるあたりのすさまじさは、そのまま人生のきびしさにつながります。

わたくしは、各地に残された浦島説話をもとにして、この話をまとめました。幼い日、浦島の素朴なかたちにふれることは、日本人の心を知るうえからも、人生を知るうえからも大切なことのように思います。岩崎ちひろさんの美しい絵によって、その印象はさらに深くなることでしょう。



松谷みよ子……1926年生れ。児童文学者。『龍の子太郎』で国際アンデルセン賞優良賞受賞。
岩崎ちひろ……1918～1974年。童画家。日本美術会会員。児童出版美術家連盟所属。



幼い子の夢と空想を描いた 新しい世界の傑作絵本

新聞・雑誌・評論家が激賞 3才～9才向き

- 1 ロバの ロバちゃん デュボアサン文絵 厨川圭子訳 耳のつきかたが気に入らないロバちゃんが、あれこれ友だちのまねをしてみますが……。コルテコット賞作家のユーモラスな傑作
- 2 ほら きこえてくるでしょ ジョンソン文 アレクサンダー絵 岸田衞子訳 夜、ベッドで、小さな物音を聞いて音あてごっこをするビリーちゃん……。絵も文も詩的な傑作
- 3 ニヤーンといったのは だーれ ステアエフ文絵 西郷竹彦訳 幼い子が周囲への認識を深めていく過程を、小犬や猫の姿をかりてユーモラスに描いた傑作
- 4 よかったね ネットくん チャーリップ文絵 八木田宜子訳 パーティーにでかけたネットくんは、途中スリル連続の大冒険。着想と構成が新鮮で、運不運の転回が楽しい傑作
- 5 モーモーまきばの おきゃくさま エッツ文絵 山内清子訳 動物たちが集って、楽しいパーティーをはじめました……。コルテコット賞作家の傑作
- 6 ゆめって とても ふしぎだね スミス文 アルムクィスト絵 那須辰造訳 幼い子が、夢というものを認識する過程を、詩的な文と絵でたくみに構成した傑作
- 7 すてきな 三にんぐみ アンゲラー文絵 今江祥智訳 悪名高い三人組のどろぼうが、ひよんなことから城を作り、孤児を養うはめになったという、世界的人気漫画作家の愉快な傑作
- 8 ぼうしをほしがった ライオン タウンゼンド文絵 白木茂訳 はげ頭を隠そうと必死になるライオンを、タイル画によって明るくユーモラスに描いた傑作絵本
- 9 チック
タック じかんって なあに? グレイク文 ワイス絵 森比左志訳 ほんともりをつく間が1秒間——と子供の遊びや生活に密着させて、時間の話を興味深く語った知識の絵本

偕成社・世界おはなし絵本 (19) うらしま たろう
文・松谷みよ子 絵・岩崎ちひろ 発行者・今村 広

印刷・大日本印刷株式会社 ©1967年 松谷みよ子 岩崎ちひろ

1967年7月第1刷 1975年11月第5刷 8793-303190-0904

PUBLISHED BY
KAISEI-SHA
printed in Japan

発行所 東京都新宿区市ヶ谷
砂土原町3の5・振替東京1352 偕成社



547.

偕成社 / ¥780

8793-303190-0904